きしむお産

②綱渡り

離れる医師 増す重圧

「肉体的にも精神的にも限界だった。開業は自分の体を守るためだったんですよ」

岡山市幸町にある五階建てビルの一角。こぢんまりした診察室で、井上産婦人科クリニックの院長井上隆さん(五六)は、勤務医時代に書き留めていた分娩記録のファイルを繰った。

二〇〇〇年に個人で開業。その際、「分娩」は扱わないことにした。婦人科系治療と健診に専念。そう決断した理由は、勤務医時代の過酷さにあった。

「あのままだったら疲れ果てて、妊婦や胎児の異常も見落としていただろう」

□ □

岡山大医学部を一九七八年に卒業。当時はまだ妊婦や新生児の死亡が決して珍しくなかった。小さな命を救いたい一心で選んだ道だったが、いつしか歯車が狂い始めた。

「先生、緊急です」

常勤が一人しかいない病院の勤務医時代、夜間や休日の呼び出しが二十回を越える月はざら。眠らないまま丸二日働き続けることもあった。車を運転中、信号待ちの間に居眠りし、クラクションで何度も目が覚めた。

追い打ちを掛けたのが、妊婦や家族と医師との関係の変化だ。

「『お産は安全』という考えが一人歩きしているせいか、早産など異常があると激しく責められるようになった」と井上さん。「二度と来るか」と吐き捨てられたり、出産後に費用を払わないまま病院から消えるなど、後味の悪いケースも目立ってきた。

新たな命の誕生を支え、妊婦や家族とともに喜びを分かちあう。そんな産婦人科医としての醍醐味は薄れ、報われなさがしだいに気力をそいでいった。

□ □

厚生労働省によると、全国の医療施設で働く産婦人科医は一万七十四人(〇六年)。この十年で10・6%も減少した。百六十七人(同)いる岡山県内でもやはり同時期で10・7%の減。医師の高齢化や産科を希望する医学生の減少が背景にあると言われる。

井上さんのように「産婦人科」を掲げながら分娩を扱わない医師も増加する。仕事に燃え尽きたり、医療過誤訴訟の多さなどを敬遠しての「分娩離れ」が、現場の人手不足を一層深刻にしている。

岡山県内で分娩を行う病院・診療所の数は一九九六年の七十六施設から、〇五年には五十二施設と三割も減少した。

□ □

「こんなぎりぎりの状態で、このまま分娩をやっていていいのかと思うこともある」

児島市民病院(倉敷市児島駅前)の医師藤森照良さん(五九)。年間約二百件の分娩をたった一人で支える。

いつ始まるか分からないお産に備え、分娩室の明かりが見える目と鼻の先のマンションに住む。父親が危篤になった時も、実家の岡山市から分娩のため病院に駆け付けた。

約二年前、児島地区の診療所二カ所が相次いで分娩をやめた。地域で唯一お産を扱う藤森さんの重圧は増すばかり。でも、補充のめどはない。

「定年まであと数年。何とか態勢を整えたいのだが…」

個々の医師の頑張りに支えられ、綱渡りのお産が続く。

過去のお産記録を見返す井上さん。懸命に走り続ける医師にも限界はある